

平成30年7月豪雨、連続して来襲した台風、北海道、大阪の地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を祈念しております。

特集

・農研機構で育成した果樹新品種

p1

・持続的な生産のための生産力強化に関する現場との意見交換について

p4

中央果実協会からのお知らせ

・2018年アジア果実会議・展示商談会等について

p6

・第57回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展

p8

業務日誌

p8

果物を食べて
応援しよう!

被災地を応援

特集

農研機構で育成した果樹新品種

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹茶業研究部門
品種育成研究領域長 別所 英男

I はじめに

地球温暖化が叫ばれる中、近年、猛暑や度重なる台風の襲来など、気候変動が激しくなっています。このため、果樹産地では高温による果実品質の低下や台風による果実の落果被害などが果樹経営に悪影響を及ぼしています。さらに、農研機構の行った予測では2060年代には現在のリンゴ主産地の多くが、暖地リンゴの産地と同程度の気温になる可能性があるとしており、長期的な視点での温暖化対策が重要となってきました。

温暖化に対する果樹への悪影響として、着色不良、花芽不足、果肉軟化、晩霜害、日焼けなどがあり、ウンシュウミカンの浮皮やニホンナシの発芽不良なども問題になっています。温暖化で影響が出やすいものの一つとして着色不良があります。リンゴを例にとると、成熟期の高温によって着色が妨げられ、一般には15～20℃のやや低温条件で着色が促進されます(写真1)。着色を向上させる技術として、葉摘み等の着色管理、施肥の削減、整枝・剪定などがありますが、栽培技術での改善には限界があります。そこで、着色良好な品種や優良な着色系統に更新することが急務であり、農研機構果樹茶業研究部門では高温条件でも着色良好な果樹新品種の開発に力を入れています。



20℃ 25℃ 30℃

写真1 リンゴの着色に及ぼす温度の影響
注)照明付き恒温器を用いた着色の簡易評価法の結果

II 農研機構が開発した最近のおすすめの品種

農研機構果樹茶業研究部門が最近育成した品種の中から、温暖化に対応し、着色が優れるリンゴ「紅みのり」、「錦秋」、ブドウ「グロースクローネ」について紹介します。

1.リンゴ「紅みのり」

1) 育成の背景と来歴

温暖化はリンゴ栽培にも影響を及ぼしており、特に気温の高い時期に果実が成熟する早生品種の「つがる」において果実の着色不良、果肉軟化、油上がりなどの品質低下が問題になっています。そのため、高温条件でも果実品質が低下しにくい早生品種「紅みのり」を育成しました。

「紅みのり」は、1981年に「つがる」に「ガラ」を交雑して選抜した品種で、2017年に品種登録出願公表されました。名前の由来は、果皮が赤く着色する特徴である「紅」と果実がたわわに実っている様子である「みのり」を組み合わせたものです。



写真2 「紅みのり」の果実

2) 果実特性

夏期が高温となる暖地の栽培条件でも果皮は赤く全面に濃く着色します(表1、写真2)。さびの発生が少ないため、果面はきれいです。果形は楕円形でやや縦長となり、果実重は300g程度です。果肉がやや硬く、果汁の量は中程度です。糖度は13.6%程度

表1 「紅みのり」の果実特性

品 種	果実重 (g)	果皮		さびの 多 少	糖 度 (%)	酸 度 (g/100ml)	果肉硬度 (lbs)	果汁の 多 少	日持ち (日)
		色	着色程度						
紅みのり	302	赤	やや多～多	無～少	13.6	0.31	15.5	中	12～14
つがる	282	赤	中～やや多	無～少	14.2	0.29	13.9	やや少～中	7～10

(農研機構 (盛岡) 2014～2016)

表2 「紅みのり」の生育特性

品 種	樹 勢	短果枝の 着 生	短果枝の 開花盛期 (月/日)	S遺伝子 型*	収穫盛期 (月/日)	収 量** (kg/樹)	収穫前 落果	裂果率 (%)	斑点落葉病 抵抗性
つがる	中	中	5/8	S ₂ S ₇	9/13	31.1	中	0	抵抗性

*交雑和合性を決める遺伝子のタイプ、**2014年当時7年生

(農研機構 (盛岡) 2014～2016)

で、「千秋」や「ジョナゴールド」より糖度がやや高く、適度な酸味もあり、食味は優れています。10月に市場関係者を対象として早生ふじとの食べ比べを行いました。着色と食味の点での優位性が認められました。また果肉が褐変しにくい点も評価されました。果実の日持ちは常温で10～14日で、「千秋」と同等かやや短く、「ジョナゴールド」より長いです。



写真3 「錦秋」の果実

で「つがる」よりやや低く、酸含量は0.31g/100ml程度で「つがる」と同程度です。食味は「つがる」よりやや淡泊ですが、肉質はしっかりしており、総合的には「つがる」と同等の品質です。果実の日持ちは常温で12ないし14日で、「つがる」より長いです。早生品種の時期は高温であるため、棚持ちが問題となることが多いのですが、その点でも「紅みのり」の優位性があります。

3) 生育特性と栽培上の留意点

樹姿は開張性で樹勢は中位、短果枝の着生は多いです(表2)。開花期は盛岡市で5月上旬であり、「つがる」とほぼ同時期です。S遺伝子型はS₃S₅で、「つがる」などの主要品種とは交雑和合で相互に受粉樹として利用できます。果実の成熟期は8月下旬から9月上旬で、「つがる」より約2週間早いです。結実が安定しており、収量は「つがる」と同等かやや高い結果が得られました。

裂果の発生率は18%前後で、「つがる」より裂果が発生しやすいため、過度の果実肥大は裂果の発生を助長しますので、適正な肥培管理を行うことが必要です。また、収穫前の落果が発生しますので、落果防止剤の散布が必要です。

4) 今後の普及に向けて

着色管理の容易な早生の赤色品種として既存のリンゴ栽培地帯で利用できます。特に、温暖化により既存の早生品種で着色不良等の品質低下が問題となる地域への導入が期待されます。早生品種としては棚持ちが良く、油上がりも出にくいので、小売店と

しては扱いやすい商材です。

2.リンゴ「錦秋」

1) 育成の背景と来歴

リンゴでは甘い品種が好まれますが、早生と中生をつなぐ時期に収穫できる品種には、このような消費者嗜好に合ったものはありませんでした。そこで、甘味が多く歯ざわりが良いことに加え、成熟期の気温が高くても濃赤色に着色しやすいリンゴ新品种「錦秋」を育成しました。

1994年に「千秋」に 4-4349(「つがる」×「いわかみ」)を交雑して選抜した品種で、2017年に品種登録出願公表されました。名前の由来は、秋の収穫期に濃赤色に熟した果実の様子を「錦」のように色鮮やかな紅葉にたとえています。また「秋」は母親品種である「千秋」に因みます。

2) 果実特性

果皮は濃赤色で着色しやすく、さびの発生はほとんどありません(表3、写真3)。果形は球形で、果実重は300g程度です。果汁が多く、肉質は緻密で歯ざわりが良いです。糖度は15.4%、酸度は0.34g/100ml

表3 「錦秋」の果実特性 (果樹茶業研究部門 2014～2016)

品 種	果皮の		果実重 (g)	果肉硬度 (lbs)	果汁の 多 少	糖 度 (%)	酸 度 (g/100ml)	日持ち (日)
	着色	さび						
錦秋	多	無～少	305	14.3	多～やや多	15.4	0.34	10～14
千 秋	やや多	無	315	13.7	多	14.4	0.50	12～14
ジョナゴールド	やや多	無	353	13.4	中～やや多	14.8	0.48	5～7

日持ち: 20℃下での品質保持日数

表4 「錦秋」の生育特性 (果樹茶業研究部門 2014～2016)

品 種	樹 姿	樹 勢	短果枝の 着 生	短果枝の 開花盛期 (月/日)	収穫盛期 (月/日)	収 量* (kg/樹)	裂果率 (%)	斑点落葉病 抵抗性
千 秋	開張	やや強	中～やや少	5/8	10/6	-	12.0	抵抗性
ジョナゴールド	開張	中	やや多～多	5/7	10/22	33.6	2.3	中度罹病性～抵抗性

*2015～2016年の平均値

4) 今後の普及に向けて

着色・食味の優れる中生品種として有望であり、早生の主要品種の「つがる」と中生の「シナノスイート」をつなぐ品種として、既存のリンゴ栽培地域で幅広く利用できます。着色と食味が安定しているのが、本品種の最大の長所ですので、消費者の皆様にご安心してお勧めできる品種です。

3. ブドウ「グロースクローネ」

1) 育成の背景と来歴

近年の温暖化の影響により、西南暖地を中心に「巨峰」や「ピオーネ」の着色不良が問題となっています。このため、産地からは、高温条件でも着色が安定して優れる品種の開発が望まれています。また、食の簡便化志向が強まるにつれ、種なし果の人気も高まっています。そこで、「巨峰」や「ピオーネ」よりも着色が優れ、種なし栽培できる大粒品種の「グロースクローネ」を育成しました。

1998年に極大粒の「藤稔」に、赤色で食味の良い「安芸クイーン」を交雑して選抜した品種で、2017年に品種登録出願公表されました。名前の由来は、ドイツ語で果粒が大きい、偉大などという意味の「グロース」と王冠を意味する「クローネ」を組み合わせたものであり、さらに、黒々(くろぐろ)と安定着色する特性も名前に込めたものです。



写真4 「グロースクローネ」の果房

2) 果実特性

ジベレリン処理果の果粒重は20

g程度となり、「巨峰」、「ピオーネ」より一回り大きいです。(表5)。果皮色は紫黒色で、「巨峰」、「ピオーネ」よりもカラーチャート値が高く、安定した着色が得られます(表6、写真4)。剥皮は中程度ですが、「シャインマスカット」のように皮ごと食べられる品種ではありません。果肉特性は中間、果肉硬度は中です。糖度は19.0%と高く、酸含量は0.40g/100mlで「巨峰」より低く、食べやすいです。香気はフォクシーで、日持ちは4~5日です。

3) 生育特性と栽培上の留意点

樹勢は強く、発芽期は東広島市で4月14日頃、開花期は6月4日頃で「巨峰」より遅いです(表7)。収穫期は8月下旬で、「巨峰」、「ピオーネ」と同時期です。

ジベレリン25ppm処理を満開時と満開10~15日後に花房浸漬処理することにより、種なし栽培ができます。開花前にストレプトマイシン200

ppmを散布することにより、さらに安定した種なし生産が可能となります。また、結果母枝基部の花芽着生が良好なため、短梢剪定栽培が可能です。花穂の整形は花穂下部3~3.5cm程度を用いるのが良く、摘粒は6.5cmの穂軸に対し25粒程度とすると、450~500g程度の果房が得られます。若木のうちは樹勢が特に強いので花振り性が強いですが、樹齢が進むにつれて樹勢が落ち着いて所定の着粒数が得られるようになります。年により裂果が発生しますので、特に成熟期後半の水管理には留意し、極端な乾湿の変動を避けることが肝要です。

4) 今後の普及に向けて

東北地方南部から九州までの「巨峰」栽培地域で栽培可能ですが、特に「巨峰」、「ピオーネ」の着色不良が生じやすい西南暖地での普及が見込まれます。果粒が大きくボリューム感があることから、贈答需要にも対応できると考えられます。

表5 「グロースクローネ」の果実特性

品種名	果房重 (g)	果粒重 (g)	はく皮性	果肉特性	果肉硬度
グロースクローネ	476	20.3	中	中間	中
巨 峰	476	14.6	中	中間	中
ピオーネ	426	14.5	中	中間	中

続き					
品種名	裂果性	糖度 (%)	酸含量 (g/100ml)	香気	日持ち (日)
グロースクローネ	なし~極少	19.0	0.40	フォクシー	4.5
巨 峰	なし~極少	19.1	0.47	フォクシー	6.0
ピオーネ	なし~極少	19.7	0.44	フォクシー	5.0

農研機構(広島県東広島市)における2013-2016年(4年間)の平均値
いずれも長梢剪定樹で、満開期および満開10~15日後にジベレリン25ppmを浸漬処理

表6 西日本における「グロースクローネ」、「巨峰」、「ピオーネ」の着色(2016年)

品 種 名	カラーチャート値
グロースクローネ	9.0 (7.2-11.0)
巨 峰	7.9 (5.9-10.7)
ピオーネ	6.9 (4.7-9.5)

カラーチャート値は中部地方以西の13場所の平均値。括弧内は13場所の最小値と最大値を表す。

表7 「グロースクローネ」の生育特性

品種名	樹勢	発芽期	開花期	収穫期
グロースクローネ	強	4月14日	6月4日	8月25日
巨 峰	強	4月10日	5月31日	8月22日
ピオーネ	強	4月16日	6月4日	8月28日

農研機構(広島県東広島市)における2013~2016年(4年間)の平均値

特集

持続的な生産のための生産力強化に関する現場との意見交換について

農林水産省 生産局 園芸作物課 課長補佐(需給調整第2班担当) 光廣 政男

1. はじめに

現在、農林水産省では、りんご、みかん、ぶどうの3つの品目に、職員が直接生産現場に赴き、産地の皆様と、持続的な生産のための生産力強化に関する意見交換を行う取組を実施しています。今回は、その経緯や途中経過等を報告いたします。

2. 経緯

果実の産出額は我が国の農業産出額の約1割を占めており、特に、傾斜地が多く他の作物の栽培が困難な中山間地域においては、果樹は基幹作物として地域経済を支える重要な品目となっています。一方で、果樹は労働集約的であり、各種作業の機械化が進んでいる土地利用型作物と比較して労働時間が圧倒的に長くなっています。加えて、労働ピークが収穫期などの短い期間に集中しており、農繁期には臨時的な雇用の確保が必要な構造となっていますが、中山間地の多い果樹産地においては特に労働力を

確保することが年々困難となってきました。

このような状況の中、我が国の果樹農業を維持・拡大していくためには、①単位労働時間当たりの生産性向上、②労働力の確保、③需要を捉えつつ安定供給する生産体制の構築を同時に進めていく必要があります。一方、課題やその解決策は、品目ごと、地域ごとに異なってくるものと思います。

このため、農林水産省では、りんご、みかん、ぶどうの3つの品目に着目し、品目毎にボトルネックとなっている作業等を特定し、それを解消するために取り組むべき対策を地域毎に整理するため、今年5月から7月にかけて、職員が直接生産現場に赴き、生産者、JA、県、普及組織、研究機関、実需者等の産地の関係者の皆様と、持続的な生産の維持・拡大のための産地の課題について率直に意見交換する取組を行って

います(表1)。

表1:意見交換を行った産地

りんご	青森県弘前市(5月24日) 岩手県奥州市(6月7日) 長野県松本市(6月15日)
みかん	静岡県三ヶ日地域(5月22日) 和歌山県有田市(5月14日) 愛媛県八幡浜市(5月11日) 福岡県八女市(5月21日) 長崎県佐世保市(5月22日) 熊本県熊本市(5月23日)
ぶどう	長野県中野市・長野市(6月11日) 山梨県山梨市・笛吹市(実施予定)

3. 果樹農業の課題と今後の方向性について

意見交換を実施するに際し、農林水産省において、果樹農業の課題(ボトルネック)とその解決に向けた今後の方向性について改めて整理を行いました。以下にその一部を紹介いたします。

(1)果樹農業のボトルネックの所在
①労働生産性のボトルネック

前述のとおり、果樹農業は、収穫などの機械化が困難な作業や、剪定な

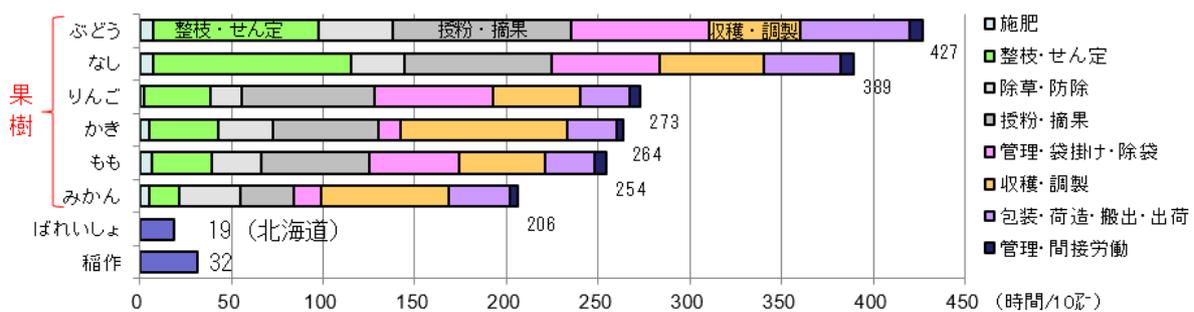


図1: 主要果樹、水稲及びばれいしょの作業別部門労働時間(10aあたり)

資料:農林水産省「営農類型別経営統計平成24年産」

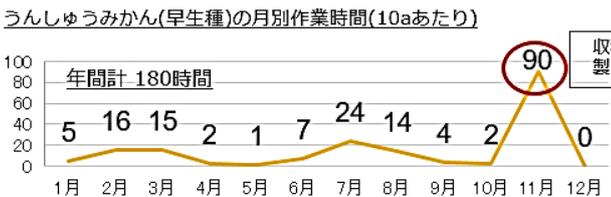


図2: 月別作業時間(10aあたり)

(各県の経営指標を基に農林水産省で作成)

どの高度な技術を必要とする作業が多く労働集約的であり、果樹の品目にもよるものの、10a 当たりの労働時間を稲作と比較した場合およそ6～13倍となっており、労働生産性の向上が急務となっています(図1)。果樹農業が行われることが多い傾斜地においては、機械導入等が困難で作業の効率化が難しいことも、労働生産性の向上を阻む要因の一つとなっています。

②労働力確保のボトルネック

労働ピークが収穫期などの短い期間に集中しており、作業量の多い時期と少ない時期の差が激しいのも果樹農業の特徴です(図2)。このため、収穫期などの農繁期には臨時的な雇用の確保が必要となりますが、人口の減少、高齢化、都市部への人口集中等が進行している現状では、中山間地の多い果樹産地において臨時雇用を確保することは年々困難となっています。一方、年間を通じた常勤雇用のためには、農閑期の業務をいかに確保するかが課題となります。

③規模拡大と担い手の確保のボトルネック

果樹農業者が直近10年間で約2割減少するなど、果樹においても経営体数の減少・高齢化が進行しています。そのような状況の中、産地を維持し、国産果実を持続的に安定供給していくためには、経営体当たりの経営面積の拡大と新規就農等の新たな担い手の確保が不可欠です。しかし、果樹経営ではスケールメリットが単純には働きません。整枝・剪定作業などの、アルバイトには任せられない高度な技術を必要とする作業にかかる労働時間に限界があること、収穫等に必要となる臨時雇用者が多大となること等の理由で規模拡大がなかなか進んでいません。新規就農者の確保についても、改植・新植を行うと未収益期間が発生すること、技術の習得に長期間を要することなどの果樹農業特有の課題が存在します。

(2)ボトルネックの解消に向けた今後の方向性

①省力樹形等の省力化・効率化技術の導入

近年、主要果樹品目で省力樹形の開発が進んでいます。省力樹形は、慣行樹形と比べて、①作業が効率化できること、②整枝・剪定等に高度な技術を必要とせず初心者でも取り組みやすいこと、③機械導入が容易であること、④未収益期間が短く早期成園化が可能なこと、などのメリットがあります。作業の効率化により労働生産性を向上させ、規模拡大を可能とし、高度な技術を必要とせず早期成園化も可能なことから、新規就農者でも取り組みやすく、新たな担い手の確保にも資する技術です。

②基盤整備と一体となった生産性向上

急傾斜地で機械化や省力化が困難な地域においては、基盤整備と一体的となった取組が必要です。基盤整備により緩傾斜で作業性のよい園地とした上で、省力樹形等の省力化・効率化技術を導入すれば、労働生産性が飛躍的に向上し、担い手への園地集積の進展等も期待できます。このように、労働生産性の向上や持続可能な果樹生産のためには、省力化技術の導入等のソフト面と基盤整備等のハード面の連携した取組が効果的です。

③経営の多角化による雇用の確保

経営に加工部門を取り入れ通年労働を生み出すことで、所得の向上に加え、雇用の確保にも成功している事例がみられます。このように、経営の多角化は、安定的な労働力の確保にも有効な手段です。

4. 意見交換会(1回目)で得られた意見

意見交換会では、冒頭、農林水産省より、その趣旨や問題意識等(上記の2. 3. の内容)を説明した上で、生産者をはじめとする出席者の皆様から数多くの貴重な御意見を頂きました。ごく一部ですが、まとめた形で以下に紹介します。

○労働力確保の問題、は品目・地域を問わず共通の課題となっている。特に農繁期においては地域内で

労働力の取り合いとなっており、農繁期の重ならない産地間や、農業以外の分野からも労働力を融通する仕組みの導入が必要ではないか。

○省力樹形の導入には、品目、地域において取組に差がある。地域をあげて導入に取り組んでいる場合もあるが、現在の栽培技術を変更することに対する抵抗感、不安感が強くなかなか導入が進んでいない地域や、省力樹形の効果は認めつつも、初期投資が多大となるため導入に踏み切れない地域もある。

○作業の効率化のためには選果作業の効率化が不可欠。例えば、みかんでは、日中の収穫作業のみならず家庭選果などの夜間作業が必要となっており、生産者にとって大きな負担となっている。ICT技術の導入等により選果作業を抜本的に高度化することが必要。

○基盤整備の重要性は認識しつつも、急傾斜で条件が不利な地域では、大規模な基盤整備を行うことは難しい。

5. 今後の進め方について

現在、農林水産省では、一回目の意見交換会で出された現場の意見を踏まえ、産地ごとの課題、その課題への当面の対応策と将来に向けた中長期的な対応策、それにより目指すべき産地の姿等を整理し、「生産性向上、労働力確保のためのボトルネックと対応策」の地域版を作成しているところ。今後は、それを基に再度産地の皆様と意見交換を行い、必要に応じこれを繰り返すことで、課題解決に向けた方策を産地の皆様と共にとりまとめていきたいと考えています。

6. 終わりに

この度の意見交換は、時間や人員の制約からほんの一部の品目・産地しか回ることができませんでしたが、現場の皆様から貴重な御意見を数多く頂戴することができました。農作業や業務でご多忙のところ、本意見交換会に参加いただいた現場の皆様には心から感謝申し上げます。課題の解決に向け、引き続きよろしくお願ひします。

2018年アジア果実会議・展示商談会等について —情報部—

当協会では、アジア青果物市場の動向を把握するため、今年20周年を迎えたアジア果実会議・展示商談会に参加するとともに、香港における果実の流通について調査を行いました。

＜アジア果実会議＞

9月4日、41カ国から450名以上が参加して(主催者発表)、香港のアジア国際博覧館でアジア果実会議(AFC)が開催されました。

この会議はアジアにおける果実流通の活性化を目的としていますが、節目の年を迎えた今年は過去20年間のアジア地域における果実商取引の総括及び今後の取組等について講演や討論が行われました。



アジア青果物市場に関する討論の様子

すなわち、①この20年間でアジアの生鮮果実市場が大きく拡大した(輸入が2.4倍、輸出が3.7倍)、②中国のWTO加盟等大きな状況の変化があった、③日本という安定した高級市場がある一方で、アジア全体では若く向上心のある消費者が多く、中流層に代わってアッパーミドルが台頭する時代となった等の見解や、④流通形態は伝統的なものとスーパーマーケットに二極化しているが後者に移行しつつあるとともに小売注文の電子化が注目される、⑤現状ではアジアで消費される果実の6割がアジア産であるが中南米等域外からの供給

の増加が見られる等の状況認識が聞かれました。

また、⑥今後も中国、ベトナム等で輸入消費の増加が見込まれる、⑦一口にアジア市場と言っても国や地域により嗜好は様々であるので、それらの嗜好に対応した多様な品種の投入などが必要である等の意見が聞かれました。

分科会では、韓国市場のビジネスチャンス、アジアにおける柑橘ブーム、伝統的小売市場やコンビニ市場の動向について、講演、討論が行われました。

＜アジア果実展示商談会＞

9月5日から7日までの3日間、AFCと同じ施設の大ホールを二つ使い、アジア果実展示商談会(AFL)が開催され、主催者によると46カ国から826の企業・団体が出品し、うち27カ国がパビリオン(大区画や通路の両側を使った国別集合展示)を設置、70カ国以上から延べ約13,500人の入場者がありました。

出展物はほとんどが生鮮果実でしたが、ジュースなどの加工品や資材・機材の展示も見られました。また、商談スペースを設けている出展者が多く、会場のあちらこちらで商談が行われていました。

AFL出展者数上位10カ国

順位	国名	出展者数
1	中国	209
2	豪州	50
3	スペイン	49
4	イタリア	44
5	エジプト	43
6	米国	40
7	韓国	34
8	ニュージーランド	27
9	オランダ	25
10	南アフリカ	24

出所:主催者資料から集計



中国のパビリオン



オーストラリアのパビリオン

出展企業・団体の国別では中国(香港・台湾を除く)が昨年同様約200社と圧倒的に多く、豪州、スペインが昨年同様約50社とこれに次ぎ、イタリアとエジプトが共に昨年の約70社から40数社と大幅に減らしたものの、これらに続きました。

また、アルジェリア、アゼルバイジャン、セルビアの3カ国が初参加したほか、韓国、フィリピン、インドネシア等がアジアの輸出国として存在感を増した(業界紙)と評されました。

我が国からは、青森りんごグループ、(株)ローヤル及び連携企業、トキ



青森りんごグループの展示

タ種苗(株)、(株)フジキカイの4組が昨年に引き続きブースを構え、出展者からは「継続して出展することが重要」等のご意見が聞かれました。



ローヤルグループの展示

展示場内の2個所の会場では「ビジネスフォーラム」など3種類のセミナーが開催されました。

「ビジネスフォーラム」では、品種改良の進展、バナナ貿易のトレンド、新たな供給元としての東欧と中央アジア、包装の機能と廃棄物削減等、青果物の生産と貿易・流通に関わる講演と討論が行われました。

「クール・ロジスティクス」では、生鮮物貿易と低温輸送の動向、コールドチェーンへの投資、収穫後ロスの低減等について、また、「スマート園芸」では電子商取引、果実収穫ロボットの開発、生産・流通におけるデータ利用等について講演・討論が行われました。



会場内でのセミナーの様子

＜日本産果実をめぐる状況＞

JETRO香港を訪問し、日本産果実をめぐる状況について、次のようなお話を伺いました。

○9月中に香港から北京・上海への旅客鉄道の直通運転が開始、年内に香港・マカオ連絡橋が開通、2020年には旧空港の跡地に大型商業施設が開業を予定するなど新たな動きが

あり、「チェンジ」がキーワード。○上記の動きに先だち、既に大陸からの買い物客が増加。大陸との境界に近い沙田地区の大型店が大陸からの買い物客で賑わっている。

○果実を含む日本産食品の販売は小売店の「ウリ」になっており、従来から扱っていた日系・旧日系や地元資本の高級店のほか、地元資本の中級店や伝統的市場にも浸透。

○香港から西日本の地方空港への定期直行便が多いこともあり、香港から日本への観光客が増加。日本で本物の味を覚えた消費者を対象とした高級日本料理店が増えている。

○ヘルシー志向を背景に果実や蜂蜜などの天然の甘みが人気。日本産果実は、中秋節等のギフト商材のほか、ケーキ、タルト、アイスクリーム等の材料として利用。

○一方、パッケージに日本語を用いた模倣品が出回っているほか、韓国産、豪州産等が強力な競争相手に。

○日本産果実の香港への輸入額(香港ドル(HKD) 2017年)は、りんご1.9億(金額シェア13%、国別3位)、ぶどう1.2億(3%、6位)、いちご1.2億(24%、3位)、もも1.1億(32%、1位)等。(1HKD=15円)

＜日本産果実の販売状況＞

日系や地元資本の高級スーパー、庶民的な公設市場等で、果実の販売状況を調べました。

品目別では、りんごが日本産果実の中でもっとも存在感を示していました。りんごの品種別ではふじと王林が多く、価格帯では、品種や販売店によりかなりの幅がありますが、他国産(中国、米国、NZ)に比べて明らかに高値で販売されていました。

なしについては、今年の同時期に比べて二十世紀を中心に販売量がかなり少ない印象を受けました。品種では幸水、豊水が多く見られました。他国産では、台湾産の豊水が高級店において、同一店内の日本産(他品種)よりは安いものの、他店の日本産(豊水及び他品種)と同程度の価格で販売されていました。

日本産のももは、他国産(韓国、米国、スペイン)に比べて3~4倍程度(特売品や小玉はその半分程度)の高価格帯で販売されていました。

ぶどうでは、シャインマスカットが最も多く、庶民的な青果店や露天商でも売られていました。韓国産シャインマスカットの価格は、日本産のうち低価格のものと同程度でした。



旧日系の百貨店で売られる日本産のりんごとなし(左からふじ、豊水、二十世紀)



繁華街の露店で売られる日本産シャインマスカット(手前中央)ともも(手前右)

品目にもよりますが、一部の他国産が価格面で日本産に迫っており、また、消費者の間で有機農産物に対する関心が高まっていることから、香港の果実市場で高品質・高価格の日本産果実の地位を維持するためには、一層の取組が必要であると感じられました。

(参考)主要品種の販売価格帯 (HKD/個)

品種	日本産	他国産
王林・ふじ	13~39	8~9
むつ・ジョナG	20~39	*5~9
二十世紀	18~30	—
幸水	22~40	—
豊水	16~24	25
黄金桃・水蜜桃	28~79	11~24
シャインマスカット	128~249	138~139
巨峰	33~59	*23~49

調査中に店頭で確認できた果実1個当たり(ぶどうは1包み当たり)の価格。サイズ、品質は考慮していない。1HKD = 15円
*は他品種または品種不明

(公財)中央果実協会

編集・発行所

公益財団法人 中央果実協会

〒107-0052

東京都港区赤坂 1-9-13
三会堂ビル 2F

電話：03-3586-1381

FAX：03-5570-1852

編集・発行人

今井 良伸

印刷・製本

(有) 曙光印刷



当協会 Web サイト

URL:

www.japanfruit.jp**第57回農林水産祭「実りのフェスティバル」への出展**

—需要促進部—

平成30年11月2日(金)及び3日(土)の2日間、東京都豊島区の池袋サンシャインシティにおいて第57回農林水産祭「実りのフェスティバル」が開催されました。当協会も展示ブースを設けて、「毎日くだもの200グラム運動」の理解増進のためのパネル、ポスターの展示や国産果物等を原料とした新商品開発の取組成果の紹介等を行ったほか、200グラムの果物とはどれくらいなのかを実際に秤って実感してもらうコーナー

や、果物の消費などに関するクイズを行い、来場者には記念品としてサンプル商品や「毎日果物200グラム」をアピールする缶バッジをプレゼントしました。

会場には2日間で5万2千人の来場者が訪れました。当協会のブースにも、試食品やサンプル商品などをご提供いただいた事業者の皆様からのご支援のお陰もあって、親子連れから高齢の方まで沢山の方が訪れ、大盛況のうちに終えることができました。

**お知らせ**

毎日くだもの200グラム運動メールマガジン「くだもの&健康ニュース」を発刊しています。

多くの方の読者登録をお待ちしております。

メルマガの読者登録方法は当協会下記ホームページをご覧ください。

<http://www.japanfruit.jp>

業務日誌

- | | |
|-------------|-------------------------------------------------|
| 30.10.10 | 内閣府による事業活動の状況等に関する立入検査(於 中央果実協会) |
| 30.10.11 | 食育セミナー(於 東京・東京農業大学) |
| 30.10.11~12 | 果樹経営支援対策事業等事業実施評価委員会現地調査(於 山梨県) |
| 30.10.20 | 食育セミナー(於 宮城・仙台白百合女子大学) |
| 30.10.25 | 食育セミナー(於 大阪・四天王寺大学) |
| 30.10.25~26 | 果実基金制度落葉果樹連絡協議会及び中国四国地区果実生産出荷安定基金協会連絡協議会(於 鳥取県) |
| 30.11. 2~ 3 | 平成30年度農林水産祭「実りのフェスティバル」に出展(於 池袋サンシャインシティ) |
| 30.11. 6 | 第20回全国果樹技術・経営コンクール第1回審査会(於 三会堂ビル) |
| 30.11. 8~ 9 | 九州地区果実生産出荷安定基金協会連絡協議会(於 鹿児島県) |
| 30.11.15 | 中間監事監査(於 三会堂ビル) |
| 30.11.26 | 第20回全国果樹技術・経営コンクール第2回審査会(於 三会堂ビル) |
| 30.11.29 | 果樹消費拡大セミナー(於 仙台市) |

今回人事異動はありません。